

養護学校における医療的ケアに関する調査研究及びモデル事業成果について

文部科学省特別支援教育課

1 医療機関との連携

- ① 県レベルでの実施体制の整備を図ったことにより、地域の医療機関からの協力が得られ、教師が医療的ケアを行うことについてのバックアップを受けることができた。このことにより、教師が看護師との連携の下に安全かつ的確に3行為を実施することができた。
- ② 緊急時の医療的バックアップ体制について整備が図られ、安全面に十分配慮した体制が整備された。

2 教育的効果

- ① 教員がかかわることで、教育活動を中断することなく、授業の継続性が保たれるようになり、学習が計画的に行われた。
- ② 児童生徒の生活範囲が拡大し、環境からの働きかけが大幅に増え、学習の基礎が培われた。
〔 医療的ケアを学校で受けられるようになることは、毎日学校に登校できることにつながり、これまで、自宅や病院で訪問教育を受けていた頃に比べ、様々な経験ができるようになってきている。例えば、校内の多くの仲間や教職員とのかかわりがあり、それらに応えることでコミュニケーションが大きく広がるなど、家庭では得ることのできない様々な刺激が得られている。 〕
- ③ 自立心が養われた。
〔 限られた人間関係の中で生活している児童生徒にとって、教員がその関係の中にはいり医療的ケアを行うことは、保護者から離れた生活を経験し、他者の受け入れができるようになり、自立心が養われることになる。 〕
- ④ 教育の基盤である信頼関係が高まった。
〔 毎日の授業を行う教員が医療的ケアを実施することで、児童生徒との信頼関係をより強固なものにしている。どんなに障害が重度・重複化していようとも、探求心は持っている。毎日の授業の中で児童生徒の興味・関心などに応じて教材等を工夫して指導を行っている教員が医療的ケアを行うことで、その教員に対する安心感や、信頼感が寄せられるようになり、他人を受け入れる基盤ができる。 〕

また、信頼関係が築かれることで、指導内容も素直に受け入れられるようになり、学習効果も大いに期待できる。

⑤ 身体内面の健康観察により、健康管理が充実した。

重度・重複障害児の学習を継続するためには、健康管理がもっとも重要である。食事、排泄、睡眠など生命の維持のための基本的な健康管理が学習の場にも求められている。常に、児童生徒の身近にいて体調の変化を感じられる教員による健康管理は、快適な学校生活を送る上では必要であり、安定した状態を長い時間過ごすことができ、教員に対する信頼が強くなるとともに、指導効果が高まった。

⑥ 生活リズムを確立することができた。

医療的ケアの必要な児童生徒が、毎日登校できること、学校で経管栄養などの対応を行うことで、毎日の生活のリズムが確立し、体調が安定した。

3 保護者から見た成果

① 安全面での体制整備が図られたことにより、安心して学校へ登校させることが出来るようになった。

② 学校待機がなくなり、保護者の負担が軽減された。

保護者自身の体調の安定にもつながり、他の家族へ目を向けたり、PTA活動へも参加が出来るようになった。気持ちに余裕を持つことが出来るようになったことで、子どもに対しても余裕を持って接することが出来るようになった。

③ 子どもの成長を実感できるようになり、学校への信頼が増した。

4 教師から見た成果

① 看護師がそばにすることで、安心して医療的ケア等に携わることが出来た。

② 医療的配慮・健康状態のことを看護師に相談でき、指導に生かされるとともに、教育活動に重点を置くことが出来た。

③ 看護師が身近にすることで、知識・手技等の研修を受けることが出来た。

④ 健康管理・健康指導に関する教員の資質の向上につながった。

⑤ 予見と注意の義務の徹底により、教員の危機管理意識の高揚につながった。